第8章　ソビエト国民の諸相：民族と言語

民族・言語政策は，ソ連時代の人々の生活と国家政策の間の矛盾をもっとも明らかにするものである．その政策によって影響を受けたのはウズベキスタンのみならず，旧ソ連の全領土であった．ソビエト政権にとって，民族・言語政策は決定的な重要性を持っていた．ソビエト政権はそれまで帝政ロシアが植民地として扱ってきた地域の諸民族を解放することをめざした．そして，これらの地域において新しい政権を作り，帝政ロシアと新しいソビエト政権の違いを明確にしようとした．そこで，革命後のボリシェヴキ政権は帝政ロシアの植民地の統治制度を廃止し，第2章に述べたコレニザーツィヤ政策を実施し，これらの地域の住民に対して教育を与えることを課題として掲げた[1]．

同時に，ソ連を構成した共和国のソビエト政権寄りの知識人を多く政権に迎え，そうでない人を反国民活動の疑いで刑務所に送ったり死刑にした（第3章）．ソビエト政権としてはその教育レベルが最高潮に達した時，ソビエト国民としての民族意識が二重の意味で人々にとってより重要なアイデンティティになるという計算だった[2]．この目標を達成するために考えられたのが，民族政策，言語政策，識字に関する政策であった．しかし，これらはソビエト政権の予測に反し，ソ連崩壊の過程においても重要な役割を果たすこととなった．

---

1)　ソ連時代のコレニザーツィヤに関しては，Terry Martin, *Affirmative Action Empire, Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923–1939*, Ithaca and London : Cornell University Press, 2001, 1923–1939頁参照．

2)　このようにソビエト国民形成が逆効果に至り，むしろ民族意識を強めてしまったという見解については，Yuri Slezkine, "The USSR as a Communal Apartment, or How a Socialist State Promoted Ethnic Particularism", *Slavic Review*, Vol. 53, No. 2, Summer, 1994, 414–452頁参照．

1. ソビエト政権の民族政策とウズベキスタン

1.1 民族・言語政策の中心としてのロシア化政策

ソ連設立当初は，革命家の間では民族政策を慎重に進めなければならないという認識があった[3]．同時に，民族・言語政策はソビエト政権が帝政ロシアと本質的に異なる部分を強調する機会でもあった．帝政ロシアは多くの領土を植民地化し統治をしたが，ソビエト政権はその植民地に住む人々や領土を解放し，自発的にソ連に加入することをめざした[4]．その結果，複数の中央アジア，カフカースの旧植民地が，民族的にも，メンタリティの面でも多様な国民から成り立つソ連という国の一部を構成した．

その多様性から，ソビエト政権は民族政策で言語表記のローマ字化や各民族語の形成の支援，その言語での教育促進，読み書きの普及など様々な試みを行った．これまでの植民地政策とはまったく異なる政策を打ち出し，帝政ロシアとの本質的な違いを訴えた．さらに，各共和国において，現地民族の住民の雇用に際して彼らの優先的な扱いも呼びかけた．そうすることで，かつて帝政ロシアに少数民族として扱われた人々に教育と就職の機会を与え，ソビエト政権はこれらの民族の味方であり，ロシア人の民族主義を保護する政権ではないということをアピールしようとした．

この政策は，多くの課題に直面しながらもしばらく進められた．その結果，多くの人が学校や大学に行けるようになり，読み書きのできる人も増えた．帝政ロシアの植民地時代において，ウズベキスタンを含む中央アジアでは教育を受ける機会はきわめて限られていたが，革命以降はより多くの人に与えられ始めた．さらに，各民族の言語教育にも力が入れられ，民族語の読み書きやその教育に不可欠の教材開発にも人的・資金的な投資がなされた．

しかし，多様な民族に平等に教育と就職の機会を与える民族政策の勢いはし

---

3) その具体例については，Terry Martin, *Affirmative Action Empire : Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923–1939*, Ithaca and London : Cornell University Press, 2001 参照．

4) 帝政ロシアのロシア化政策については，S.N. Abashin, D. Yu. Arapov, N.E.Bekmakhanova, O.V. Boronin, O.I.Brusina, A.Yu.Bykov, D.V.Vasil'ev, A.Sh.Kadyrbaev, T.V.Kotyukova, P.P.Litvinov, N.B.Narbaev, Zh.S.Syzdykova, *Tsentral'naia Aziia v sostave Rossijskoi Imperii*, Moskva : Novoe literaturnoe obozrenie, 2008, 特に 171–177 頁参照．

だいに弱くなり，1930年代後半からはロシア人を中心とした「ソビエト国民化」政策に変わっていった．これは事実上コレニザーツィヤ政策の断念を意味しており，その影響は人事から社会生活や言語にまで及んだ．

それまでウズベキスタンを含む各共和国の主要な民族とその言語の重要性が訴えられてきたのに対し，1930年代における政策はそれぞれの民族の言語，文化の重要な役割を認識しつつも，ロシア語での民族間コミュニケーションは不可欠であることを強調した．その政策の象徴となったのは1938年にSNK（大臣会議）と共産党中央委員会による「各共和国や郡の学校におけるロシア語教育の義務化」についての決議である．その決議によると，各共和国における教育機関の教育課程にはロシア語教育が導入されるようになった．それは，ロシア語を学ぶことで他の共和国の人ともコミュニケーションができ，将来的に共通言語になるロシア語がこれらの共和国の人をソビエト国民として統合できると考えたからである．これに対し，懸念を表明した知識人もいた．彼らはそのような政策は最終的にロシア語の全面導入と新しい形の植民地化につながると危惧したのである[5]．しかし，彼らの意見は無視された．

しだいに各共和国には，その共和国の主要民族の言語で教える学校（一般的に「民族学校」という）と，そうでない学校（ロシア語学校）が現れた．民族学校の中でも学年によりロシア語クラスと現地語クラスに分けられた．どちらの学校で子どもを学ばせるのかは親が決めたが，大半はロシア語学校を選んだ．当時の制度は，ロシア語がわからないと良いキャリアが手に入れられなかったため，わが子により良い将来を願う親は皆そうしていた．それに加えて，ロシア語学校ではモスクワや，レニングラード，その他のロシアの大学で教育を受けた人が教壇に立っていたので，教育レベルは民族学校より高かった．親は自分の子どもをロシア語学校に入学させようと必死になり，ロシア語学校の人気に拍車をかけた．また，非ロシア人から教育者が育ったとしても，本人は民族学校よりロシア語学校への就職を希望する．それがロシア語学校の地位を一層高め，民族学校に差をつけることになっていった．

5）ロシア型の劇場導入を事例としてロシア化政策を植民地政策の観点から検討した論文として，Laura Adams, "Modernity, Postcolonialism, and Theatrical Form in Uzbekistan", *Slavic Review*, Vol. 64, No. 2, Summer, 2005, 333–354頁参照．

このようなロシア化政策が強化されると，ロシア語の能力が共産党や政府機関に就職する際の不可欠なスキルとして考えられ始めた．しかも，多くの書類がロシア語で書かれていたことから，ロシア語でのコミュニケーション能力のみならず読み書きの必要性も求められ，ロシア語習得者の数は増え続けた．ソビエト政権はこれを「国際化」の一環として正当化していた．このような社会的状況が，非ロシア人でありながら日常生活で母語のウズベク語よりロシア語を話し，ウズベク語よりロシア語に優れたルシーを生み出した．

1.2　民族間の違いと民族的なメンタリティの違い

ソ連時代，民族間の交流は自然に形成されていったにもかかわらず，それぞれのアイデンティティが現れる場面でメンタリティの違いが生じていた．その違いが著しく表面化していたのが日常生活である．

一例として，結婚観も含め結婚を挙げる．ロシア人やルシーとよばれるロシア化された人たちは，結婚を決める際に大学や友人などを通してその相手と知り合い，本人同士が結婚を決める傾向が強かった．彼らにとっての結婚は，家と家の付き合いではなく，2人の意志によるものと考えられていた．このような若者は結婚する前に数ヶ月をおいて付き合い，結婚を決めていた．相手の民族，宗教や他の特徴はほとんど意味を持たず，個人の性格が何より重要とされた．政権や政府機関もこのような民族間の結婚はむしろ歓迎しており，これこそが民族の別を越えた「ソビエト国民」を中心とする新しい社会を築く近道だと考えた．ウズベク人の間にもロシアなどに留学し，そこでロシア化され，ロシア人や非ウズベク人と家庭を築いた人は多く，彼らがルシーの中心となった．

このような結婚は政府レベルでは歓迎されていたが，日常レベルではそれほど受け入れられなかった．近所の人がロシア人やルシーの一家を敵視するようなことはなかったが，そうかといって深い付き合いもしなかった[6]．同時に，ロシア人やルシーの特徴として，個人中心の生活を好み，近所の人との共同作業に積極的に参加したことや関わりを持とうとする人はあまりいなかった．そ

---

6)　ルシーに関しては，ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン―変わる国と揺れる人々の心（アジアを見る眼110）』，アジア経済研究所，2008年，43–44頁参照．

れがウズベク人とロシア人やルシーとの大きな違いで，ウズベク人による差別がなくても彼らが孤立する状態はあった．その結果，いろいろな問題が生じ，一つの例は以下の証言にも現れている．

> 私と夫はロシアの同じ大学で知り合った．私はロシア人，彼はウズベク人だった．大学を卒業してから私たちはウズベキスタンに移り住み，生活を始めた．この時代，あなたはウズベク人だ，あなたはロシア人だといって区別されたり差別されたりすることはなかった．私たちは就職して子どもも授かった．
>
> しかし，今は誰も私の娘をお嫁に迎えたいとは思わない．ウズベク人の家に入ると，今は「お前はロシア人だ」と言われ，ロシア人の家では，「お前にはウズベク人の血が流れている」と言われる（ロシア人）[7]．

ウズベク人のメンタリティはロシア人やルシーのそれとは異なっており，同じ結婚に対する見方にもその違いがよく現れている．以上のこととは対照的に，ウズベク人にとって結婚は，当人同士の個人の問題ではなく，個人に加えて家族と家族の問題でもある．その考え方に従うと，自分で相手を見つけても家族による「審査」があり，その「審査」の結果，家族の一員として迎えるにふさわしいかどうかが決まる．当人同士が気に入っていても家族から反対されることも多く，伝統的なウズベク人の間では親の合意を大事にする人はソ連時代でも今でも多い．ソ連時代，伝統的なウズベク人は，相手を自分で見つけて親の了解を得るか親に結婚する候補となる人を見つけてもらい，その人と会って話をしてから決める人が少なくなかった[8]．以下の証言ではそのことが具体的に語られている．

> 当時の結婚する方法には二通りあり，一つは親に紹介されて結婚することだった．もう一つは本人たちが知り合って結婚することだ．
>
> 私の弟は私たち（家族）にはっきり，「親が見つけてくれた子と結婚する」

7)　この証言に関しては，ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン―変わる国と揺れる人々の心（アジアを見る眼110）』，アジア経済研究所，2008年，38頁（ルシーに関する節）参照．
8)　これに関しては，ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン―変わる国と揺れる人々の心（アジアを見る眼110）』，アジア経済研究所，2008年，169–178頁参照．

と言った．それで何人かの女の子を見て回り，彼に一番ふさわしいと思った子を紹介した．私の2人の姉たちは自分で結婚相手を見つけて結婚した．

私の場合は，この二つの方法の組み合わせだった．夫は私を近所の薬局で見かけて気に入ったらしい．しかし，彼の親にはすでに気に入っている女の子がいて，その子に早く会うよう強く勧めたそうだ．でも彼は私が気に入っていて，親に私のことを話した．それから私の住所を調べて，私がどんな子か，気に入るかどうか，まず私をみてきてほしいとお願いしたという．

彼の親は私たちがまだお互いに話したことがないと知って，彼に私と話してみるように言った．そして彼は話すきっかけを作ろうと，ある日私の家のドアを叩いた．彼が「この家で部屋を借りているX君とY君はいるか」と聞いてきたため，私は「この家では誰にも部屋を貸していない」と答えて，彼に私の家の周辺で貸していそうな人の名前と住所を教えた．そこで少し話をして彼は帰っていった．

その後，私たち（ウズベク人）の習慣どおり，彼の母親は私の母にあいさつと結婚の許しを頼みに来た．母が家にいなかったので，私が家の中に案内してお水を入れてあげた．それに彼の母親は大変良い印象を持ってくれて，彼と私を結婚させたいという気持ちが強くなったようだ．両家の両親は私たち2人が会って，お互いのことをもっと良く知る機会を与えることで合意した．それから彼に会い，とても良い印象を抱いた．彼はあまりハンサムではなかったけれど，私はそもそもそういう人を求めていなかった．私の父もハンサムではなかったけれど優しくて立派な人だったので，外見より中身を重視した．（証言者No. 12，ウズベク人，女性，タシケント）

2. 「ロシア化」とウズベキスタンの社会状況

これまで述べたロシア化政策に対する見方は，一般の人の間では大きく三つに分かれた．それはロシア化政策を積極的に支持した人，その政策の利点を評価しつつもウズベク社会の独自性を維持しようとした人，そしてロシア化を拒んでまったく受け入れない人である．

ソ連崩壊以降もそれぞれの見方は主張され，ウズベキスタン社会において各

支持者の間で歴史と現代の民族・言語に関する議論は続いている．

2.1　「ルシー」とよばれる社会層の存在

ソ連時代に共産党やソ連政府の教育やイデオロギー，人事などの政策により，ロシア語・ロシア文化を極端に美化し，日常生活や仕事場で母語であるウズベク語をさけ，ロシア語のみで話そう（書こう）としたウズベク人や非ロシア人は少なくなかった．先にも述べたように彼らはルシーとよばれており，彼らからみるとロシア語とロシア文化は「文明化」への「入口」であった．評論家のトフタハジャエワ氏によると1940年代から1960年代にかけてそのような人の数は増えていったという．

> 1940–1950年代に学生時代を過ごした人は戦争の最前線を経験した．その時，（民族間の）一体感と（戦争で多くの人を失った）大きな悲しみを共有し，困難を乗り越えてきたことを覚えている．早く新しい（他民族）社会の中で生活したかった．他民族と民族間結婚をする人も増え，将来に対する希望と悪いことはすべて終わったという意識が広まった．
>
> 市内のクラブは客で溢れかえり，本屋や劇場も必要とされた．こうした風潮は1960年代にフルシチョフ時代の改革と，多くの人がGULAG（労働キャンプ）から戻ってきたことと重なりピークを迎え，人々に社会主義がもたらした勝利と公平な社会への期待を持たせた[9]．

この社会層はロシア語ができない人に対して非常に批判的であり，時代に遅れているとみなしていた．彼らにとってはウズベク語やウズベク人の伝統は二の次であり，日常生活の中でこれらの影響はしだいに薄くなり，最終的になくなるとみられていた．彼らは人間関係においても，ウズベク人や他の中央アジア民族にみられる近所付き合いや拡大家族ではなく，個人主義とロシア式のあっさりした人間関係を好んでいた．

9）Marfua Tokhtakhodzhaeva, *Utomlennye proshlym : Reislamizatsiia obshhchestva i polozhenie zhenshhchin v Uzbekistane*, Tashkent, 2001, 190頁参照．

伝統的な散髪屋の代わりに，新しい形態の散髪屋が作られた．
【タシケント空港内の散髪屋，1958年，ドシュキン撮影】

当時，大学で教員だったけれど，すべての書類はロシア語で書かれていて，ウズベク語は誰も受け付けさえしてくれなかった．ロシア語がわからなければ何もできなかった．昇進もできないし，（尊敬されるべき）人間として扱われなかった．選択肢はまったくなかった．

私のウズベク人の学生のほとんどは，私がウズベク語で話しても何を教えているのかわからなかった．それで授業中は，ロシア語で話すしかなかった[10]．

このような人は特に都市部に多く，彼らは母語と同等かそれ以上にロシア語の読み書きをマスターしていた．以上にもあったように，両親は子どもに将来が約束されるロシア語での義務教育を受けさせる傾向が非常に強かった．地方出身者や伝統を重んじる家の人は引き続き子どもをウズベク語の学校に預けて

10）Marfua Tokhtakhodzhaeva, *Utomlennye proshlym : Reislamizatsiia obshchestva i polozhenie zhenshchin v Uzbekistane*, Tashkent, 2001, 186–187頁参照．

いた．しかし，ウズベク語の学校出身者で出世を望んでいる人はやはりロシア語の会話力を磨こうと努力し，それが彼らを成功に導いた．

ルシーの間で圧倒的に多かった考えは，日常生活でロシア語を使うのは特別な社会的地位にある証だというものだった．そう考えていなかった人もウズベク語で教育を受け伝統的な生活スタイルをおくっている人に対して少し見下した見方をしていた．ソ連時代ルシーの家庭はソビエト政権から歓迎されており，彼らこそが新しいソビエト国民の象徴であるという見方がされていた．確かに，考え方などからみてもそのようなロシア化された人々は，ウズベク人や非ロシア人であったにもかかわらず，ロシア人以上にロシア語やロシアの文化と歴史を学んでおり，ソビエト政権の最終的な目標であるソビエト国民形成の成功例でもあった．ソ連崩壊後，彼らは独立したウズベキスタンの将来にもっとも後ろ向きになっており，その多くはウズベク人のメンタリティや考え方を受け入れることに苦労している．トフタハジャエワ氏の著書にも興味深い証言が含まれていた．

> 両親が私を（ロシア語の）小学校に入れた時は，ほとんどロシア語ができなかったため，1年目は非常に苦しかった．両親は私をロシア語の学校で勉強させなければと思い，（ロシア語の）言語環境にどっぷりつからせれば一気にロシア語で話せるようになると決めつけていた．（省略）
>
> 私の学校は大変良い教育をしていたので，卒業生はモスクワ，レニングラード，キエフ，ノボシビルスクとタシケントのもっとも良い大学で教育を受けた．私の同級生たちも各分野で立派な専門家になり，モスクワ，キエフ，ボストンやテルアビブで勤めた．しかし，タシケントに残った者は素晴らしい教育を受けたにもかかわらず他の人に遅れをとってしまい，それほど成功しなかった．その理由は明らかで，「ウズベクチリク（ウズベクのメンタリティ・社会的な環境）」になじめず，失敗しても再起できないまま社会からの孤立につながったからだ[11]．

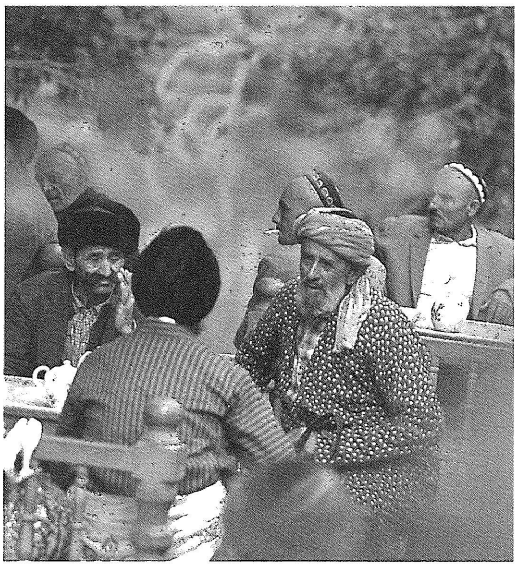
11）Marfua Tokhtakhodzhaeva, *Utomlennye proshlym : Reislamizatsiia obshchestva i polozhenie zhenshchin v Uzbekistane*, Tashkent, 2001, 186-187頁参照．

2.2 「ロシア化」への反感

第二の社会層はロシア語化とロシア文化に反感を持っている人も少なくなく，これまでの過程を懸念して観察しながら，その流れに巻き込まれないようにウズベク独自の文化を守っていこうとした．

そのような人はロシア化政策を受け入れず，むしろ昔からの生活を続ける人も多かった．それは主に一般国民で，権力に関係のなかった人々である．彼らは共産党の党員になることを望んでおらず，政府機関に勤めていても，指導的な立場ではなかった．彼らは上からロシア語とロシア化が強制されても，それに積極的に反対することはなかったが，日常生活では家族間やコミュニティ内でウズベク語もしくはそのコミュニティの主要な言語（カザフ，キルギス，タジク，タタール語など）を守り，伝統も維持した．仕事場ではロシア語を話さざるを得なかったが，それをよく思っていたわけではなかった．

彼らはルシーといわれた人から後ろ向き，保守的で良い教育を受けていない



物事の伝統的なあり方を支持した人々のたまり場となったのは，喫茶店などであった．【リャビハウズの周辺で休んでいるブハラ住民，1966年，ブハラ，クズミン撮影】

人としてみられ，ウズベキスタンに住みながら差別を受けることもしばしばあった．そのほとんどがウズベキスタン都市部の旧市街に住んでいるか，地方出身者だった．

以下の証言は彼らの考え方を反映している．

> ソ連時代のもっとも良くないところは，やはりロシア化政策だった．みなロシア語で話させてウズベク語などロシア語以外の言語を忘れさせようとした．ウズベク人は（自分たちの国ウズベキスタンにいながら）後ろから『お前らは羊だ！』『文明化されていない動物だ！』と言われたこともあった．そのようなとき，私たちは口論を避けるためにも黙ってその場を離れた．ロシア化政策に反対することも反発することもできなかった．（それは）不可能だった．なぜなら，決定的に重要なポストはすべてロシア人やロシア化を支持する人々が占めていた．＊（証言者No. 2，ウズベク人，男性，タシケント）

ロシア化の程度は人事政策にも影響していた．先にも述べたように，重要なポストへの採用の際には候補者がロシア語を話せるかどうかが非常に重要であった．しかも，共産党幹部の場合，必ず彼らをコントロールできるロシア人か非ウズベク人が任命されていた[12]．共産党幹部の最高位レベルの人事までがそのような論理に基づいて行われていた．

> ソ連時代はとても良かったが，唯一気になっていたのはロシア人の支配とウズベク人の扱いだ．ロシア人はウズベク人に対して優越感を持ち，いつもウズベク人を支配していた（ように思う）．
>
> 皆も知っている通り，共産党の第一書記がウズベク人であれば第二書記

12）その具体例として，ソ連書記長と各共和国の第一書記の関係やウズベキスタンにおけるソ連の人事制度については，ティムール・ダダバエフ「地方主義と国家―ウズベキスタンとタジキスタンにおけるソビエト人事政策とその影響―」『国際政治経済研究』，2008年，13-37頁．またソ連時代の人事政策については，Carlisle, Donald S., "The Uzbek Power Elite : Politburo and Secretariat (1938-83)", *Central Asian Survey*, 5 (3/4) 1986, 91-132頁；Carlisle, Donald S., "Geopolitics and Ethnic Problems of Uzbekistan and Its Neighbors", in Yaacov Ro'i ed., *Muslim Eurasia : Conflicting Legacies*, London : Frank Class, 1995, 71-105頁参照．

は必ずロシア人だった．ロシア人の過剰な支配さえなければ生活はもっと良かったはずだ．（証言者No. 40，ウズベク人，男性，フェルガナ州）

ソ連時代の人事政策においてロシア人とウズベク人のバランスを確保するために，それぞれの民族出身者を任命していたが，地位が高くなるほど，そのバランスは崩れ，ロシア人が優利な立場に立っていた．先の第一書記の例もそうだが，以下の証言のように，そうでないポジションでもロシア人のプレゼンスが確保されていた．

ウズベク・フィルムの製作においても，ウズベク人がウズベク語の映画を作っていても，ロシア人を製作者として入れないと映画製作の許可は出なかった．これらは一例にすぎず，あらゆる分野でこのような状況があった．＊（証言者No. 2，ウズベク人，男性，タシケント）

人事面以外のことで彼らの反感を買ったのは，例えば，圧倒的な数の町の通りにロシア人かスラブ系もしくは非ウズベク人の名前が名付けられたことである．彼らはそれをロシア化政策の一環とみなし，それこそがウズベク語やウズベク文化に対する脅威ととらえた．

私たちが住んでいた街区の通りの多くには，私たちがあまり知らないロシア人やウクライナ人の名前がつけられていた．例えば，シェフチェンコ通り，ゴーゴリ通りなどだ．これらの名前は住んでいる人たちから見れば（愛着やつながりという面で）何の意味もない．これらの人物のことはよく知られていないのだ．百歩譲って，これらの人物を知っていたとしても，それらの通りにどういう関係があるのかを考えれば，彼らの名前をつけるのはやはりおかしいと思う．これは当時のソビエト政権とウズベク・ソビエト社会主義共和国のあり方を象徴するものだ．当時は，ロシア人の参加なしに，ウズベク人のみで何かを決めることは禁じられていた．＊[13]．

13）この証言に関しては，ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン―変わる国と揺れる人々の心（アジアを見る眼110）』，アジア経済研究所，2008年，30頁参照．

言語や文化を失うということは，単にコミュニケショーン・ツールを失うだけでなく，その文化，伝統と宗教を失うことと関連しており，それに対する反感は強かった．その反対の姿勢は世代間で異なっており，60代以降の人は，若い人よりもその政策に反対する声が多かった[14]．若い人はしだいにロシア化を生活の一部として受け入れ始め，それは特に注意すべきことではなくなったが，以下の証言にもあるように，年配の人にとっては何年たってもロシア化政策に対する脅威は消えなかった．

> 祖母が田舎からやって来て，私たち兄弟に宗教について教えようとしたことがある．彼女は私たちにいつも「あなたたちはロシア語学校に通っているので自分たちの言葉だけじゃなくて宗教も失いつつある」と言っていた．いつの日か，自分たちが正しくなかったことをわかるだろうと予言していた．彼女は実に正しかった．今になって私たちはそれがわかるようになった．（証言者No. 27，ウズベク人，女性，ナマンガン）

この証言と同様のことが長くウズベキスタン社会をみてきた専門家にも指導されている．トフタジャエワ氏によると，ロシア語学校の卒業生の大半は無宗教的であり，ロシア語での教育はこれに決定的な影響を与えたという[15]．

このようにロシア化政策に反対した人は，ただ母語ではない言語を学ぶことを拒み，ロシア化に反対したのではなかった．ロシア化は彼らの生活スタイル，就職，宗教観や文化を直撃し，不安と不満を生んだことがわかる[16]．

14）ソ連時代においてウズベク人とは何か？という概念についての文学者の間の議論については，William Fierman, "Uzbek Feelings of Ethnicity. A Study of Attitudes Expressed in Recent Uzbek Literature", *Cahiers du Monde russe et soviétique*, Vol. 22, No. 2/3 (Apr.–Sep., 1981), 187–229頁参照．

15）Marfua Tokhtakhodzhaeva, *Utomlennye proshlym : Reislamizatsiia obshchestva i polozhenie zhenshchin v Uzbekistane*, Tashkent, 2001, 188頁参照．

16）その原因とソ連時代における民族間対立に関しては，Ronald Grigor Suny, "Nationalist and Ethnic Unrest in the Soviet Union," *World Policy Journal*, Vol. 6, No. 3, Summer, 1989, 503–528頁参照．

2.3 国際化の一環としてのロシア化の支持者

そして，これら2種類の中間に位置し，バランスの取れた政策の支持者であるのが第三のグループである．ロシア語教育そのものを前向きに受け取る人は多く，彼らからみるとウズベク語に加えて，ロシア語を学べることは将来的に様々な面でプラスに働き，キャリアのみならずより広い世界観を持つことにつながると考えていた．彼らの多くは母語のウズベク語や独自のウズベク文化を保持しながらロシア語やロシア文化を学び，自分たちの能力をさらに高めようとしていた．ロシア化政策に対し懸念を表明する人も少なくなかったが，彼らはロシア語化の極端な形を避けることができれば，ロシア語とウズベク語を社会の中で使い分けることや二つの言語に堪能になることは可能だと考えていた．

彼らは，独自のウズベク文化を大事にしながらロシア語学校に通い，そこでロシア語とロシア文化，そしてソ連の形成からその時点までのソビエト文化を学び，それをウズベク文化と同時に社会に存在しているものとして受け入れられるようになっていた．彼らはそれをウズベク文化と対立関係にあるものとはみておらず，教育面では両方の良い点に着目していた．

> 私の家では弟以外の兄弟は全員ロシア語学校に通っていた．その理由は，ロシア語学校での教育はウズベク語学校よりも質が高かったからだ．
>
> 学校生活では特に新年会が記憶に残っている．みんな色とりどりの衣装を着て，舞台に立っていた．母は私のためにすてきなドレスを作ってくれて，それを着て私も出演した．それは華やかで楽しい1日だった．（証言者No. 3，ウズベク人，女性，タシケント）

ロシア語教育を受ける子どもにはタタール人，朝鮮人，カザフ人，ユダヤ人など様々な民族がいた．彼らは先生や友達とはロシア語で会話しており，教授言語としてもロシア語が使われていた[17]．ロシア語学校ではロシア語のみで教えるクラスが一般的だったが，人口が多い地区や都市部から離れていてその地

17）朝鮮系の人の生活や習慣については，"Koreitsy Uzbekistana : Sem'dyasat let trudnostei i uspekhov na novoi rodine, *Ferghana. Ru*, July 30, 2007 (http://www.ferghana.ru/article.php?id=5257)；またはKim P.G., *Koreitsy Respubliki Uzbekistan : istoriia i sovremennost'*, Tashkent, 1993参照．

伝統的な生活とウズベク語の社会的な地位向上の支持者であるお年寄りの多くがよく集まる喫茶店の一例．【タシケント州，ベガバード郡，レーニン記念コルホーズ，シャムストディノフ撮影】

区に他の学校がない場合は，同じ学校の建物の中にウズベク語とロシア語のクラスが入っていた．ロシア語で教育を受ける子どもはロシア語を習得し，ロシア文化などにも詳しくなっていたが，他民族の子どもと接触することで彼らは自分の民族のアイデンティティよりも多民族でソビエト的なアイデンティティを身につけやすくなっていたようだ．彼らはそのような複雑な（他民族と自分の民族の）アイデンティティを保持し，ソ連崩壊以降も持ち続けている．しかし，彼らの子どもはそうした環境で勉強したことがないため，すでにその両方のアイデンティティの実感を失っている．

私が特に言いたいのは今の世代についてではなく，その前のことだ．私たちが生きた時代は今とはだいぶ違っていて，勉強は色々な人と一緒で，お互いの民族文化を分かち合った．

しかし今は，すべてが中途半端になってしまい，自分たちの文化もロシ

ア文化も完璧に知っている人は少ない．考え方に関しても同じことが言える．例えば，私たちの世代はソビエト的（多民族的）な考え方の持ち主だが，今（独立以降）を生きるにはそのような考え方はまったく役に立たなくなってしまった．（証言者No. 32，ウズベク人，男性，アンディジャン）

3. タシケント大地震と民族間関係

3.1 タシケント大地震

タシケント大地震はウズベキスタンの歴史の中でも衝撃的なものであると同時に，その社会の将来を決定付ける出来事となった．タシケント大地震は1966年4月26日に起き，震度8以上だったと言われる．それからしばらく続いた余震は震度5以上であったという証言があり，26日以降も震度5以上の余震は続いたそうだ[18]．

震源地はタシケントの中心にあり，タシケントの当時の人口は100万人程度（現在約270万人）だったが，建物は土からできていたため3万戸以上が倒壊しタシケントの大半が打撃を受けた[19]．当時の建物は現在とは違い，小さい一戸建てがほとんどで瓦礫の下敷きになりケガをした人が多かったようだ．しかし，犯罪などの人的被害は少なかった．

住む場所を失った人のために1万5千個以上の仮設テントが張られた[19]．これらは子どもの勉強場所としても使われた．その時期は学年末が近く，そこで小学生から高校生までが勉強していた．小学校の授業は中止になり，ほぼ全員が夏休みにソ連各地のキャンプに送られた．被害がそれほどひどくない建物には住民が住み続けた．地域研究家のゴレンダ氏の当時の記憶には以下のようなものが残っている．

私はこの年に高校を卒業する予定だった．高校はタシケントの中心にあ

18) G. Sarkisov, *Dvatsat' let iz dvadsati stoletij*, Tashkent : Shark, 1995, 53頁またはAndrei Kudriashov, "Isskustvo, kul'tura, istoriia : Tashkentskoe zemliatresenie. Legendy i byli 26 aprelia 1966 goda", *Ferghana.ru*, 2006年4月26日参照.

19) G. Sarkisov, *Dvatsat' let iz dvadsati stoletij*, Tashkent : Shark, 1995, 59頁参照.

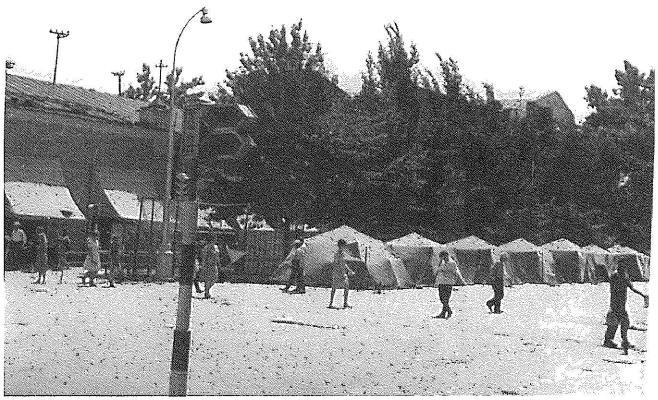
り，学校に向かっていたので私は街にいた．

最初は空爆を受けたのかと思った．大地震の数時間後にバスでマルクス通り（現サイルゴフ通り）を走ってみると，その通りにあったすべての建物が瓦礫と化していた．

しかし，国民の間にパニックはみられなかった．私の友人で，今は副市長になったグレゴリ・ミナソヴィチ・サルキソフ氏の話によると，大地震直後の犯罪率は逆に落ちたと言う．自警団の活動も積極的だったので都市の治安は保たれていた．（証言者No. 9，ウズベク人，男性，タシケント）

3.2　タシケントに対する連邦の支援とタシケントの多民族化の拡大

タシケントの再建は，多くの人が協力しあったことで，ウズベキスタンの多民族性を強調しただけでなく，国民の間に自分たちがウズベキスタンよりも広いソ連という国の一員であるという実感を与えた．そして，後にウズベキスタン以外のところで災害が起こると，それを自分たちの問題のように受け止めた．以下の証言にもあるように，タシケント大地震は当時のウズベキスタンにおける民族間関係を明らかにする象徴的な出来事となった．



【タシケント大地震の直後に，仮設住宅として建設されたテントのキャンプ，1966年】

【タシケント大地震で崩壊した建物の後片付け】

特に記憶に残っているのは，大地震が起こった時にソ連全体でタシケントを建て直したことだ．同じようにアルメニアのスピタクで大地震が起こった時は私にとって他人事ではなかった．それはソ連の共和国の国民として一つになったことの現れでもあった．（証言者No. 37，ウズベク人，女性，タシケント）

タシケント大地震が起きた翌日に，モスクワから多くの共産党・政府幹部がタシケントに飛んできて，復興についていくつもの決断がなされた．その作業の最前線で指揮をふるったのがラシードフ第一書記だった．政治的な支持と経済的な支援のおかげで，住民はこの苦しい時期を何とか乗り越えようと，日々前向きに復興作業に取り組んだ．

以下の証言からも，地震直後で様々な問題があったにもかかわらず多くの人にとっては希望の時期であったことがわかる．希望があったからこそ，大地震で受けた打撃を悲しみながら思い出す人よりも，人々の働きや他の共和国の協力など復興に向けてのダイナミズムを思い出す人が多い．

1966–67年を私はとてもよく覚えている．私たち家族は街の中心に住んでいたのでアパートもかなりの打撃を受けた．

地震直後にブレジネフがタシケントに来てポリトビュロー（政治局）の会議を開いた．タシケントの建て直しにソ連すべての共和国が貢献した．私たちが今座って話しているこの建物もその時に建てられたものだ．地震直後は確かに厳しい時期だったが，より良い生活への期待に胸を膨らませていた時でもあった．（証言者No. 18，タタール人，女性，タシケント）

復興作業はまず瓦礫を取り除き，新しい建物を建設するための下準備から始まった．その作業にほとんどの住民が自発的に参加した．各共和国からも多くの建設関係者や医療の専門家などが来て作業を手伝った．彼らの参加は復興を早めたことに加えて，タシケントの多民族化を強めた．それは彼らの多くが，タシケントが再建されてからも住み続け，ウズベキスタン社会の一員になったからである．

政府は彼らの労働を評価し，再建後にアパートやマンションを支給した．それを住民は複雑な気持ちでみていたようだ．他の共和国から復興作業を手伝いに来た彼らの気持ちを評価し，感謝していた人も多かったが，一方で，住む場所の提供がタシケント住民よりも早く行われたことはウズベク人のみならずタシケントのタタール人住民にも複雑な気持ちをもたらしたようである．

メトロや新しい建物が次々と建設された．ロシアから来た労働者も多く，彼らのためにすぐにアパートが支給されたので，私たちは少し悔しかった．私たちもタシケントにずっと前から住んでいたからだ．（証言者No. 18，タタール人，女性，タシケント）

壊れた建物の解体は重機が足りず戦車も使われた．戦車を建物にぶつけて壊していた．タシケントを建て直すためにソ連各地から学生団や建設関係者がボランティアとして参加し，彼らは必要な資材と重機を運んできた．そうしたこともあってタシケントの復興作業は1968年までに大半が終わっていた．もっとも早く復興した地区は大地震からわずか2ヶ月後で，タシケントのチランザル

やスプトニクといった非常に大きな地区でも1966年11月までに建設作業は終わっていたようだ．倒壊をまぬがれた建物はそれほど多くなかったが，日本人の捕虜もその建設作業に動員されたナヴォイ劇場は無傷だった．ゴレンダ氏の記憶によると，

> 私はいまだに驚いてやまないが，ほとんど無傷で地震を乗り越えたナヴォイ劇場でのあの出来事を思い出す．大地震の直前にベラルーシから文化訪問団が来て「ベラルーシの10日間」が始まった．ダンサーや歌手，作家といった人たちとともに，政府関係者も一緒だった．それはもう大人数の訪問団がミンスクからタシケントに来ていたので，大地震が起こってからも興行はやらなければならなかった．
>
> ある夜，劇場が人でいっぱいになっていた中で，震度7の強い余震があった．観客は興奮して席から立ち始めた．そうしたら司会者が舞台の真ん中に出て「皆さん，興奮しないで下さい．この建物は26日の大地震にも耐えたのだからこのくらいの余震には耐えられますよ」と話した．観客もそれに納得して，再び席に着きコンサートが始まった．（ゴレンダ，ユダヤ人）

ま と め

これまで検討してきたように，ソ連時代とその後においてウズベキスタンの人々のアイデンティティの最重要な単位の一つは民族である．ソ連時代から民族政策はもっとも広く議論されてきた課題の一つであり，政権はソビエト国民を統一し「ソビエト人」という新しいアイデンティティを作り上げることを試みた．その主な目的は「ソビエト国民」という旗の下に人々を統合し，エスニック・アイデンティティを超克あるいは抹消さえすることであった．

本章で扱った証言からもみえてくるように，ソビエト国民形成にはポジティブな部分とネガティブな部分があり，そのポジティブな部分としてコスモポリタンな多民族社会の構築が歓迎された．様々な文化と言語で話す人が同じ国で暮らし，どこに行っても民族的に差別されることがない社会がめざされたことについて，多くの人は懐かしさと憧れをいまだに感じているようである．タシ

ケント大地震のような出来事の際にも多くの人がタシケントの立て直しを手伝い，多民族な様相を持った新しいコスモポリタンな都市建設に成功したことは，まさにポジティブな意味でのソビエト政権の民族融合政策の一例である．

同時に，ソ連時代の民族政策のネガティブな影響として，全面的なロシア語化の導入と非ロシア文化が軽視された問題がある．ウズベキスタンの様々な民族の伝統と文化はロシア文化より格下のものとしてみられ，ロシア語・ロシア文化を身に付けることはキャリアの成功につながることから，自らの言語と文化よりロシア語やロシア文化を受け入れた生活スタイルを送る人が増えた．しかし大半の人はそのようなソビエト国民形成と言いつつ，ロシア化されることに対して抵抗し，その結果，ウズベキスタンでは，強制されたアイデンティティよりも逆に民族の絆が強くなることになった．これまでの証言からもわかるように，ソ連時代には民族間の友好を構築できたものの，それぞれの民族が独自のアイデンティティを保持し，それを脅かすものに対しては抵抗していた．宗教政策と同様，ソ連時代の民族政策が多くの国民から受け入れ難いものとなり，それに対して抗議しないまでも日常生活を通して独自の文化を守ろうとする人は多かったようである．